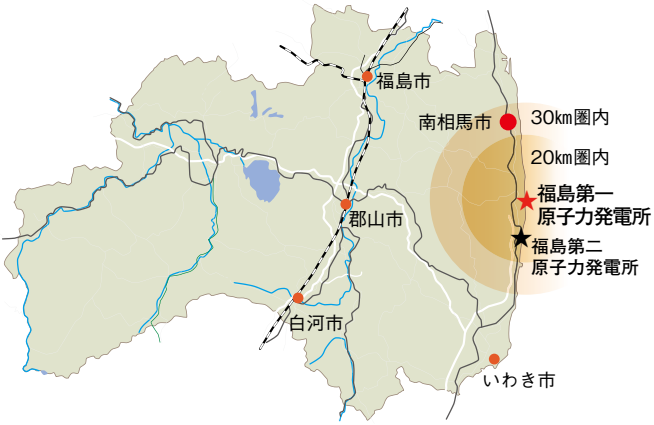
# 東日本大震災復興レポート

震災の発生直後から、
被災地生協では奮闘の日々が続いている。
地域の人びとに1日でも早くふだんのくらしを
取り戻してもらうため、
生協のお役立ちを少しでも広く確実に受け取ってもらうため、
仲間たちが弛(たゆ)まずに挑む復興への取り組みを追った。

全国から復興支援に駆けつけた、生協共立社（山形県）・東海コープ事業連合・生協ひろしま・とくしま生協・こうち生協・コープおおいたの職員たちが、「市」の開催に協力してくれた。




# 原発30km圏内の“買い物難民”を救え

## ――「負けないぞ!! 南相馬市(いち)」

## コープふくしま

震災、津波に加え、
原発事故による放射線禍に苦しむ福島県。
“三重苦”の地で住民を守ろうとする生協の闘いには、
特有の苦悩と覚悟が伴う。
コープふくしまが行政から求められたのは、
原発30km圏内での生活物資の即売会。
開催までのドラマを追った。

### 原発30km圏内の〝買い物難民〟に青物を食べさせたい

3月26日、東日本大震災の発生から2週間が経過し、福島県内の各被災地では、避難所暮らしに疲れた住民が自宅に戻る動きも出始めていた。この段階で生協が果たすべき役割は何か。被災者支援方針を定めるためのヒアリングに訪れた南相馬市役所で、コープふくしまに託された願いは切実だった。

「市民に青物を食べさせたい。市内で生活物資の即売会をしてもらえないか」

南相馬市は福島第一原発から30km圏内の自主避難区域。店舗も閉鎖され、日常の買い物をするにも隣の相馬市まで車で出向くしかない状況となっている。放射線禍で物流が途絶えがちな同地域では、ガソリンがすでに底をついた家庭も多く、4千～5千世帯が〝買い物難民〟化しているというのが、市の訴えだった。

### 被災者の目となり、耳となり、口となれ

南相馬市の要望は、翌27日のコープふくしま震災対策会議に持ち込まれた。

「南相馬市が見込む買い物客は数千人。必要とされる大量の物資を調達し、運び込むことは可能か」

「原発の状態が日々悪化するなか、30km

コープふくしま　専務理事
野中俊吉さん

圏内に生協職員を入れるのか」

喧喧囂囂の議論は、やがて「やろう」へとまとまっていった。開催日は1週間後の4月2日（土）と決まった。対策本部の壁には「被災者の目となり、耳となり、口とならなければならない」という賀川豊彦の言葉が掲げられている。関東大震災時に、いち早く被災地に赴いた生協の父と同じ使命感が、専務理事の野中俊吉さん以下、メンバーの決断を支えていた。

同日、要請を受けた日本生協連商品本部、生鮮・運営本部のメンバーは、即刻商品の手配に動いた。求められた物資には、扱い慣れたコープ商品の他に、じゃがいも・玉ねぎ・にんじん各5トンや冷凍肉300kgも含まれていた。それら生鮮品の手配は、一連の震災対応で新たにつながりを得た業者に依頼。被災者支援と聞き、日曜日の急な注文にも喜んで応じてくれた。

和日配の商品は、市中ではほとんど手に入らない納豆、コープふくしま自慢の豆腐など。

開店の1時間半前からでき始めた行列は、開店15分前には建物の外まで。

## 切実な買い物需要に応え、「よかったよね。これで」

4月2日朝7時半、即売会の要員は配送車に分乗して福島市内を出発した。原発事故による立ち入り制限地域も通るルート、行き交う車もまばらだ。

会場は休業中の「道の駅・南相馬」。4トン車2台と1・5トン車7台で運び込んだ商品は、レトルトカレーから生理用品まで約1万3千点。コープふくしまの役職員と地元の組合員、志願して加わった他生協や日本生協連の役職員総勢約50人で荷降ろし、売場づくりを進める。

各自が仕事を見つけて自発的に動き、臨時店舗は無事完成。レジ奥の壁面には「南相馬は負けない!!明日に向かって進もう!!」のスローガン、入口の脇には全国から支援に入っている他生協メンバーからの激励の寄せ書きも張られた。

開店は午前11時。待ちかねて行列ができ、ピーク時には入場まで2時間待ちとなった。2ℓのミネラルウォーター6本500円、山盛りの野菜が100円など廉価で豊富に並ぶ商品に、売場では驚きの声が上がった。ダンボール箱に山ほどの商品を詰め込む家族連れ、インターネットでこの即売会を知ったという孫に伴われた高齢者、「この子たちに卵が食べさせられる」とほほえむ母親、それぞれの買い物から、懸命な暮らしぶりがうかがわれた。

にぎわう売場。欲しかった野菜に、カップ麺に、次々と手が伸びる。

午後3時の閉店までの客数は640人、供給高は102万円となった。南相馬市の予想を大きく下回った客数。直前数日でガソリン事情が改善し、その間に買い物ニーズを満たせた住民も多かったことが推察された。閉店後、売れ残り商品の山の中で誰かがつぶやいた。

「この会場に本当に何千人も来るようじゃ、被災者のくらしがそれくらい大変だってことだから、よかったよね、これで……」

その言葉に頷いたメンバーは、休む間もなく帰り便の積み込みに動き始めていた。

レジ係の組合員理事・渡邊洋子さんが見つけて抱きついたお客さんは、津波にさらわれたエリアの運営委員さん。「連絡が取れなくて心配してたのよ」